

日蓮大聖人御書全集

つちろうごしよ

土籠御書

新版
1639

つちろうごしよ

土籠御書

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

にちろう

文永 8 年 (71)

10 月 9 日

50 歳

日朗

にちれん

あす

さどのくに

罷

こんや

寒

日蓮は、明日、佐渡国へまかるなり。今夜のさむきにつ

籠

有 様 おも

労

けても、ろうのうちのありさま思いやられて、いたわしく

そうら

との

ほけきよういちぶ

しきしんにほうとも

こそ候え。あわれ、殿は法華經一部を色心二法共にあそば

おんみ

ふぼろくしん

いつさいしゆじよう

助

たも

したる御身なれば、父母六親、一切衆生をもたすけ給うべ

おんみ

ほけきよう

よにん

読

そうろう

くち

言

葉

き御身なり。法華經を余人のよみ候は、口ばかりことばば

読

こころ

こころ

み

かりはよめども心はよまず。心はよめども身によまず。

しきしんにほうとも

たつと

そうら

てん

もろもろ

色心二法共にあそばされたるこそ貴く候え。「天の諸の

どうじ

きゆうし

とうじよう

くわ

どく

がい

童子は、もつて給使をなさん。刀杖も加えず、毒も害する

あた

と

そうら

べつ

こと能わじ」と説かれて候えば、別のことはあるべからず。

ろう

い

たま

そうら

疾

来

たま

み

籠をばし出でさせ給い候わば、とくとくきたり給え。見

み

きようきようきんげん

たてまつり、見えたてまつらん。

恐々謹言。

ぶんえいはちねんかのとひつじじゆうがつこのか

にちれん

かおう

文永八年辛未十月九日

日蓮

花押

ちくごどの

筑後殿